

〔史料紹介〕

天明八年巡見使予想問答集(下)

小笠原 二郎

〔承前〕

一 材木流水林取扱役銀者無之哉と御尋之節

材木役者先年商人二而三勾宛ニ御座候所近年看材木も高直ニ罷成候ニ付正徳五ノ一年ノ商人五勾宛被仰付候新着山手米高拾石ニ付五升宛出候ニ付無役ニ而袖取仕候尤川流仕候得ハ川役拾分一出候と可申上事

一 海辺塩焼之者役銀無之哉と御尋之節塩釜色枚ニ付御役錢壹貫五百文より貳貫百文迄ニ御座候此外所ニ寄塩ニ而色枚ニ付貳斗五升入拾表宛ニ御座候役可申上事

一 塩焼候浜君何方ノと御尋之節

西ノ浜外ノ浜海辺方々ニ而焼申候と可申上事

一 塩釜色枚ニ塩何程出候哉と御尋之節二三月ノ九十月迄塩釜色枚ニ付一ヶ月平均七拾表迄出候由可申上事

一 金銀銅鉛山御尋之節

金銀鉛銅山とも三拾ヶ所余も御座候様ニ承申候金銀銅鉛一切出不申由ニ而相止申候由右之内目屋野沢と申山之内尾太銅山と申所計銅鉛出申候由ニ而相豫罷在候由承申候と可申上事

一 錫鉄山之儀御尋之節

錫鉄山共ニ無御座候と可申上候若海辺之鉄砂取集吹候儀も有之哉と御尋候者外ヶ浜海辺之内儀ニ寄候鉄砂計取集ノ小国と申所江鉄ニ仕立申候廻道々寄砂不足ニ付相止メ申候

一 拾着者何方ノと御尋之節

縣ヶ沢深浦金井ヶ沢十三小泊蟹田今別青森江看船仕候由可申上事

一 当所ノ上方江末材木登候哉と御尋之節

毎年米材木共登候役可申上事

一 米高何程材木商何程宛登候哉と御尋之節

米石高材木高之儀者私共儀ニ御座候得者不奉存候役可申上事

一 米湊方江下ヶ候者百姓役ニ下哉と御尋之節

道程ニ応じ取賣錢被下百姓下候由可申上事

一 出火看類火ニ逢候者如何様ニ仕置候哉と御尋之節

火之元者ノ寺仕罷在候然者寺近所ニ無之所者村預ヶニ罷成候類火ニ逢候者ハ其所ニ寄飯米被下拜借も被仰付候儀も御座候由可申上事

一 親奉行不奉行之者も有之哉と御尋有之候者

親奉行卜相知候者又不奉之者有之義共不承候由可申上事
一 竄之義何と申所へ出候哉と御尋之節竄侍候場所者方々二御座候内奥那坂袋妙見堂杯と申所二而とり申候者中にも能御座候由承候段可申上事

一 駒之儀在々何方へ出候哉と御尋之節御領分中出生駒其年九十月之頃駒取役人在々江被遣帳面江記シ置候而翌年七八月之頃馬屋方之役人目利二而能キ駒者馬屋二留リ申候尤留リ申候得者代錢駒を定ニ付七貫貳百文宛被下置候中へ下々之駒者馬屋二留リ不申候此外枯木平津輕坂入内鹽谷滝野沢五ヶ所之牧二御座候此所へも出候由可申上事

一 家老城代用人諸役之義御尋之節

御家老添田儀左衛門津輕多磨津輕主水互多利監物御城代津輕文藏御用人西館織部松浦屋五左衛門雨森權八川合半左衛門兼松七郎右衛門工藤伝兵衛職名弥門高屋半左衛門役人着寺社奉行司馬彦左衛門廻向新助緒奉行三上理左衛門門佐藤理兵衛佐々木亦入町奉行佐々木四郎兵衛士渡渡人勘定奉行三橋勘之丞並再之丞相馬作左衛門有藤小左衛門成田瓦八甫此外組頭物頭之儀不奉存候由可申上事

一 足輕如何程有之候哉と御尋之節

私共儀二御座候故不奉存候由可申上事

一 駄寄定之儀如何程二有之候哉と御尋之節

所ニ寄平地難所も御座候故駄賃錢所々ニ而遣御座候当所

者何方へ何方並何里ノ内本荷何程輕 何程歩行丈何程二而御座候と可申上事

一 津輕東面南北何里程有之候哉御尋之節

御尋之者二寄寄々ハ不奉存候得共大概十三四里も可有御座候哉と可申上候耳若或者不案内二而不奉存分ハテ孫之記二御座候故不奉存候と申候而不苦事

一 土地之様子御尋之節

上方土地と直申由承候其子細者蜜柑柚子之類綿茶大竹是等之類当所二立かね候由可申上事

一 古館古城之義何方へ二如何程有之哉と御尋之節

在々方々鏡之古館數多御座候由承候得共委細不奉存候由可申上事

一 御領分中惣内高并家中侍數御尋之節

出者共儀二御座候故委細不奉存候由可申上事

一 壹里塚之儀程合近キと御尋之節

先年者四拾八丁詰壹里二而御座候所只今三拾六丁詰里之由可申上事

一 先年三西屋御逗留之内湊出入役御尋御座候而同所湊

目付承合書付差上候儀有之候而此處も石御尋有之候而書付出候様被仰付候得者率畏候段御請申候而同所湊目付承合御定帳之表不垂共荷増舊付差上可申事尤垂敷差出候様被仰付候者御附添之節奉行江相違可申上事

一 御通筋所々宮村寺新跡か古跡かと御尋有之候者古跡

にて御座候由可申上事

附在々之者共直心庵も寺と心得罷有候者多有之候向此
記も能く存候様ニ可申渡事

一 当所家中知行者地方ニ候哉藏米渡ニ候哉と御尋之節
藏米渡之旨可申上候若又番敷御尋被成候者私共儀ニ御座
候得ハ番敷者不奉存候得共安永年中之頃ハ御藏渡之由可
申上事

一 漆屑之哉と御尋之節

漆者沢々并所々ニ多御座候由可申上事

一 水漆并漆実如何程出候哉と御尋之節

私共儀ニ御座候得者如何程と申買致不奉存候年々水漆漆
実とも御取セ被成候と可申上事

一 右両品取候節人足ニ而取セ候哉御尋之節

水漆取候節着口取御座候間役人附添參候故人足ニ而着取
不申候実取候節も右之通ニ御座候得者実多成口取計ニ而
手支之節者少々御人足も出申候得共人足御座被成候得者
一日巻人ニ付三拾文宛産錢被下置候と可申上事

一 庄別之義御尋之節

平朝庄田舎庄鼻和庄石三庄とも津輕一郡之内ニ而御座候
と可申上事

一 御荷物并御家来乗懸附添者共毎日附添之義御尋之節

爰許者往来筋ニも無御座候故ケ様御荷物附候事稀ニ御座
候故荷物取取口取計ニ而雪けしとひ御怪哉尋も御座候哉
と大功ニ奉存附添罷有候段可申上事

一 千歳山如何様之所有之哉と御尋之節

屋形様御上下之御御立寄被成候御蔭所ノ千歳山と申如
御座候由可申上事

一 高岡御宮御尋御座候節

岩木山之麓御先祖様御信仰之社地御座候此近辺に御廟所
御座候ニ付番人少々被差置候由可申上事

一 去ル巳年凶作以來之義御尋被成候者同年春中殊之外
寒御座候ニ付苗生立不宜時節ニ後レ漸植付候所夏中も日

々東風吹暑氣無御座候ニ付作物一切捨下申旨より不口耳
凶作ニ而御座候右前年も不作ニ而米穀殊之外私庭ニ仕候
得共御貯貯等摺立其外他御買入米被仰付候尚又在町之
者も有御合力之及程者粟米致取続申候

右之通之凶作故御取納者上納無御座候得共翌年夫々御手
繰之上種柄并飯料夫喰等々御手当被下置候ニ付耕作も存
念之程手入行届候所折能順季ニ而熟作ニ相成候得共去ル
未耳不作申年又々凶作ニ而殆と食料不足仕候如種々御扱
被仰付御悲被下置候如前年にく時疫流行仕候而病死之
者も多御座候故御口參并御取米ヒ下置相凌申候

一 去作稔方之儀御尋被成候ハ、

去ル申年凶作ニ而不熟種相用殊更他所ノ御買入請付候
如便方ハ生育迄之内度々相捐蒔替等手当仕候得共苗不足
仕至而蒔植ニ相成折悪敷夏分蒔暑漸秋暑ニ而稔候故平年
之如く本熟ニ至リ不申其上土地不相応之種相用得候ニ付
過分之減石仕御收納物も至而不納ニ相成申候由承申候前
段之通去ル辰年巳未貳ヶ年之凶作三ヶ年之不作仕候ヨリ

種々御手配之上御手当ヒ下置候得共一統難滞仕候

一 荒地之儀御尋ニ成候者

天明三卯年凶作ニ而田畑一切稔不申百姓共困窮候所ハ時節相後礼当分荒モ御座候所追々兩荒ニ相成當時荒地無御座候と可申上事

一 所々材木山見得候仙入等之儀即河取扱候哉出材木者江戸上方江も差登セ候哉と御尋之節

已前者所々材木山も多御座候ニ付御礼銭等差上賣木等取出シ江戸上方江も差登候由近耳者石山々之分切尽ニ相成出材木も多無御座候ニ付不残御留山被仰付候御郡中御善請方并江戸上方御用木御家中町在家作等用之分計取出申候併銘々勝手ノに取出セ候而者弥以山荒ニ相成候ニ付其所々ニ而拙取方取扱候者罷在共世話仕候由可申上事

一 鹿ヶ岡峠下折橋番所々之儀御尋之節

自他之者岡所之外山道忍通候者御座候節相改番所と可申上事

一 大石ヶ沢御用木山師台所建置候所ヲ御通之節候ヶ岡町同心ハ差遣圖申候御尋之節

山方ニ付番所之由可申上事

一 蟹田湊方改候ニ者番人ニ而モ罷在候哉と御尋之節

先年若石番人も罷有候得共近耳海表遠浅ニ相成上方船モ着船多無之故番人引取町奉行取扱候様可申上事

一 平館農月湊御番人罷出候筈ニ候御尋有之候者

当所冲懸リ船并破船之改候役人と可申上事

一 蘆田石崎番所之遠見番御尋有之候節遠見番人と可申上事

附向之身之遠見ニ而候哉と御尋被成候者

怪敷船相見得候ハ其外該敷事も相見得候得者近所之役人追注遊仕候仁向の番所ニ御座候と可申上事

但遠見番所何方ノ有之向ハ之番所可然哉候御尋ニ成候ハ、

艦作蓬田石崎江浜崎石四ヶ所と可申上事尤石崎者内海外海只相見得宜候由可申上候者付乏以申上候其御座候ハ、御附添郡奉行江相違可申事

一 赤根沢御道之節林土有之哉と御尋之節

先年者御用之由御取セ候ニ付敷口番人等モ御座候所近耳石崎モ無御座候ニ付番人引取申候由可申上候

一 煤川道侍番人袴羽折ニ而御番所前江罷出下場仕可罷有候御尋有之候者

自他之者岡所の外山道忍通リ候者相改候番人と可申上事

石之通相心得御尋無之儀者不寄阿品ニ此方ハ申向敷候尤石之品所寄人に可存事常に存候而罷有候事聞馴候者此紙面之趣御答可申上候常に見馴所馴不申事此紙面ニ而初而存候品々類此所ニ者左様事者無御座候拙者共蒙之之外又者兵筋に照之所ニ者兵筋之事山方ニ而無之所者山筋之事を常ニ不存事ニ候ニ付其趣ヲ申上不奉存候由可申上事夫

ともに世間に相和同見馴候事者有之。此紙面之趣覺御
 答可申上候。天とも尋敷事者下々として申上ル不致候。二付
 没人中罷肩候ニ付御用ニ候者相尋可申由御答可申上事
 一 御尋之儀有之御答申上候者共者御用相済候以後天々
 害出シ可申事

老之御宿 浅虫御屋敷名保右衛門

藤沢要人様上下四拾四人

本亭主 野木村 庄屋小三郎

膳亭主 戸山村 新左衛門

下宿亭主 大野村 惣助

見計人 小籠村 弥十郎

大野村 小兵衛

手伝人 大野村 左兵衛

大野村 荒石衛門

同村 惣十郎

同村 十内

野通村 惣左衛門

金沢村 荒三郎

同村 兵三郎

幸畑 十助

同村 又左衛門

同村 藤兵衛

同村 専助

同村 近左衛門

古館村に左衛門
 野通村惣助
 西大野善七

右之一巻天明八戊申歳葉月下院浅虫邸に於高坂田卯三御
 宿逗留中是書記奇珍可爲者也

書工 比種子文口書

註

⑧、「御役」。①年貢、②小物成、と共に津輕藩の租税
 の一種である。本末は寄役奉仕であつたが、後には米
 又は金をもって代納した。一人一日の貢銀は五分へ三
 の文であつた（「弘前市史、藩政編」）。

⑨、「尾太銅山」。現在の青森県中津軽郡西目屋村の内。
 八光鉾山、地竹沢鉾山、滝之沢銅山、朝日沢鉛山、倉
 鉛山、尾太鉾沢、濁沢金山等の総称で、慶安三年
 （1650）の所領と言われ、銀、銅、鉛等を産出した。最
 盛期は明和の頂（1760）と言われ、天明八年（1788）
 の當時も活躍した事を物語っている。但し、本文
 に「金銀銅鉛一切出申さず」と述べている項は、恐ら
 く公儀をばばかり、領内の地下資源をなるべく隠ぺい
 しうと努めた作意の表れと見られよう（「弘前市史
 ・藩政編」による）。

⑩、「小田山」。現在の東津軽郡蟹田町の内。慶長五年
 （1600）藩費で砂鉄を吹立つたのが始まりだ（「弘前市

史・藩政編」という。慶長十五年(一六〇八)、弘前城構築の際、領内では鉄の産出がなかつたため、南部領の北前(今の下北郡)田名部から砂鉄を移入、こゝに鉄吹場を築き、築城に没立つたと言われている、この間の事情は「大畑町誌」(笹沢善平氏)にやゝくわしい。それによると、津軽の米と田名部の砂鉄を海上でひそかに物交した、最初は鉄一貫目が玄米一斗であつたが、追々高値になり、鉄一貫目に対して、玄米三斗となつた。しかしそれでも鉄不足であつたため、田名部の鉄工百三十人を策を用いて、こゝに呼び寄せ、家族ぐるみの鉄吹き作業を始めた。と書いてある。

①、「入寺しは寺預りの意」と思う。本文によれば、出火の場合は本人は入寺、近所に弄のない場合は「村預り」となっている。然し、この規定は何処から出たものか出典ははっきりしていない。今試みに、「藩政律」へ但し、山形守兵衛自筆本の八十三項「失火」の条文によれば、次の通りで、入寺も村預りも全然ふれていない。即ち、(一)失火は戸メ二十日、(二)類焼させた場合は三十日、(三)人を焼死させた場合は鞭十五、(四)御家廟や御城が類焼した場合は徒一年半と鞭三十の刑を受ける事となっている。あるいは、天明八年(一八〇八)當時には失火の罪は入寺位でおさまつたが、其後寛政律が見成したと言われる寛政九年(一七九七)頃にはこの様に刑が重くなつたのだ、とも言えるわけだが。

②、「鷹之義」。鷹は古来から狩刀や狩威のシンボルとして尊重され、各藩でも、極力、保護に努めた。津軽領内では、砂見堂(現在の青森市内)や尊名板杯(現在の南津軽郡藤崎町、本文では黒曜板杯)が鷹待場として著名であつた(「弘前市史・藩政編」と言う)。

③、「御領分中総内高」。天正十八年(一五九〇)の太閤検知の結果、四万五千石と確定したが、正保二年(一六四九)の調べだと、更に新田五万七千石余が加わり、合計十万石を突破した。これを表高に對し、表高又は内高と言つた(「弘前市史・藩政編」)。なお、後年一文化五年(一八〇〇)松前警備の功績を買われて、十萬石に昇格するわけだが、それより二百三十年以前に、すでに、実績において十萬石の実力を備っていたわけだから、その昇格は、單に、藩主の宮中席次がいくらか上つただけで、領内の民主や至情力には、いささかのプラスにもならなかつたろう、というのが大方の意見だ。

④、「家中侍數」。明確な數字はあげられないが、津軽四代信政時代(明暦——宝永年間)には、雪廻四三〇人、牛廻一九八八人、旗本滿三、二七〇人、其他一、二九二人、合計六、九八〇人である(「弘前市史・藩政編」)。下つて文政四年(一八二二)の調べだと、給人を含めて、男子人口は八、九五一一人(新纂青森県史、中編)。従つて天明八年(一八〇八)當時は、その中間

の八千人前後ではあるまいか。

㉔、「家中知行」。津輕領では、延宝七年(一六九〇)以前は、土地をもつて給支されたが、安永三年(一八〇二)からは全藩士が藏米をもつて給支された。なお、同年までの知行高は、平年の場合は六つ物成(生産高の六割)、それ以後は四つ物成(四割)となつた(「弘前市史、藩政編」)。

㉕、「去る巳丑凶作」。天明五年、乙巳の年(一八〇四)の凶作の意。天明の凶作は安永九年(一八〇〇)あたりから始まり、翌天明元年に引きつづき、同八年あたりまで、前後十年間、津輕・南部領に甚大の被害を及ぼしたと言われている。この間の事情は、藩の公式記録の外、「天明凶歳日記」。「天明凶荒録」。「多鬼志草」等に詳しいが、前後の事情をきわめるためには、「本藩明実録」II(全十八巻、山形守兵衛自筆日記、青森県立図書館蔵)がよい。

㉖、「藤沢要人様上下四拾四人」は巡見使千五百石藤沢要人、御用人、永井儀左衛門、御先番、池田兵太夫、御目附青山郡助、御勝手取締、和藤熊助、御給人、前館本五郎、亀井多仲、中小姓、矢野勇藏、山田藤左衛門、永井文治郎、近藤左治馬、松本五郎八、板野富之助、徒、村山齊藏、熊沢助八、太崎佐内、森庄之助、内田源之丞、外足輕仲間二十六人、合計四十四人(「天明八申年御巡見御通行ニ付盛岡御役人御下ヒ成候二

付石御人数宿割並七戸人馬割宿共ニ書留帖」、野村用五郎氏蔵)。

㉗、「庄屋小三郎」。代々小三郎を襲名していたので判然としないが、多分、九代目有藤茂左衛門ではあるまいか。——とすれば、文化四年(一八〇七)歿(同家系による)。